

Übungsortgel

< Disposition >

M.C-g'''56Toene P.C-f'30Toene 56Pfeifen 1Register			
MANUAL		PEDAL	
Holzgedackt	8'	Anhaengen	



<備考>

2019年12月、カトリック柳井教会に移設。

1987年、神奈川県在住オルガニストから個人練習用として依頼され設計。オルガンとしての機能を持ち、一般の家庭にも設置可能な仕様で製作、1989年に完成。演奏台規格は、小型ではあるが手鍵盤、足鍵盤を有したドイツ標準規格オルガンになっている。一般のオルガンには種々の音色（ストップ、音栓）が使われるが、このオルガンには木製パイプのみ、音栓1種類（音管56本）を組み込む。足鍵盤は手鍵盤の音栓を共有し、個別の音栓はない。オルガニストが一般家庭内で手足の練習をするには、大型オルガンと同様の演奏台規格仕様で、可能な限りコンパクトにすることが望まれた。アプライトピアノ＋足鍵盤設置面積に納まる程に設計した。

2006年、練習用オルガン所有者のオルガニストが帰天し、所有者知人の東京在住オルガニストにオルガンは引き継がれる。引き続きオルガンは練習用として使用されていた。

2019年、2代目所有者が加齢によりオルガンを手放すことになり、次の設置場所は縁あってカトリック柳井教会となった。

本来オルガンとはパイプオルガンのことである。明治期、日本に輸入された足踏みリード・オルガンを単にオルガンと呼ぶ様になり一般化する。リード・オルガンは1800年代初期にフランスで発明された。遙か以前の紀元前246年、パイプオルガンはエジプトのアレキサンドリアで発明され、暴君ネ

ロがオルガンを演奏したことが知られている。オルガンが日本に初めて伝来したのはキリシタン時代の 1579 年、巡察使ヴァレリアーノ日本に 2 台の小型オルガンを携えて来た。1580 年 1 台は大友宗麟の元に、1581 年 1 台は織田信長の元に運ばれた。1582 年本能寺の変でオルガンは焼失した？ 有馬セミナリオで天正遣欧少年 4 人は、オルガン演奏を学び、ポルトガルのエボラでオルガンを演奏したと伝えられている。エボラの教会には現在もそのオルガンはある。

カトリック柳井教会オルガン製作者の洗礼名はヴァレリアーノ、音楽の聖人、聖セシリアの夫がヴァレリアーノだったことで、洗礼名に頂く。日本にオルガンをもたらした巡察使の名が、ヴァレリアーノだったこと、神の計りは限りなくと思う。

ヴァレリアーノ山野政登司